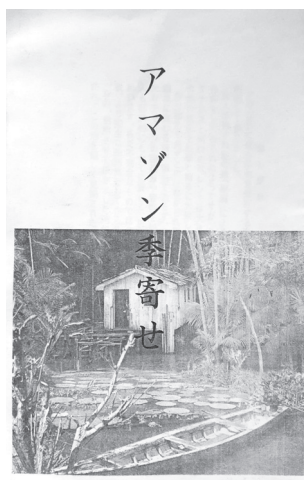
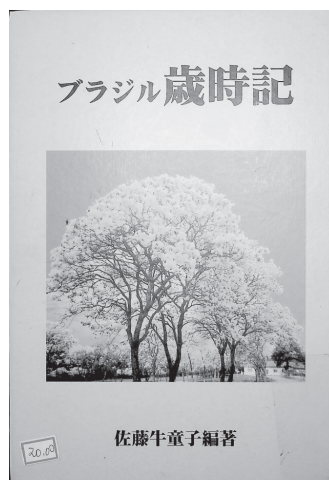


# 熱帯歳時記『アマゾン季寄せ』の特色と意義 ——『ブラジル歳時記』との比較を通して——

久富木原 玲



アマゾン季寄せ



ブラジル歳時記

## はじめに

アマゾンは、世界中の人々に認知された魅惑的な地域である。しかし、実際にその姿を知る者は数少ない。ブラジルの国民ですら、その大半はアマゾンを訪れたことなどなく、日本人や欧米人が見るのと変わらぬ、遠くて幻想的な存在のままなのである。

丸山浩明『アマゾン五〇〇年』岩波新書

2023年8月18日刊

この新書が上梓された2023年8月、私はアマゾン河口都市ベレンに降り立っていた。そしてそこからさらに陸路で約200km奥地のトメアスーに入った。ベレンは人口約150万人の港湾都市で、『アマゾン季寄せ』が編集された地であり、トメアスーは日本人移民による胡椒の栽培が有名で、アマゾンの俳句にもしばしば登場する。

私がアマゾンを初めて訪れたのは、今から7年前の2016年9月、アマゾン川流域で200万人を擁する最も大きな都市・マナウスにあるアマゾナス連邦大学で開催された国際学会で講演をする機会に恵まれた時であった。

その際、私は「アマゾン」という言葉を、前掲書で丸山氏が述べておられる通り「幻想的」で神話的響きに満ちたものとして捉えていた。私と一緒にこの国際学会に参加したサンパウロ大学の数人の先生方も、ひとりを除いてアマゾン訪問の経験はなかった。これも丸山氏のコメントの通りである。

だが初めてのアマゾン訪問は、私に大きな気づきと出会いをもたらした。

ひとつはこのブラジル日本研究国際学会でハイカイ＝ポルトガル語ハイク（以下、現地の呼称である「ハイカイ」とする）に関する研究発表が数多くなされ、全体のおよそ4分の1を占めることを知ったこと。ふたつ目はアマゾン地域で創られた極めてセンスの良いポルトガル語ハイカイの句集及びこの地で編集された日本語の俳句集と歳時記に出会ったことである。学会会場で日本語俳句・ポルトガル語ハイカイに関する資料を探し、これら3つの素晴らしい資料に出会うことができたのだった。

そのひとつが『アマゾン季寄せ』であり、残りのふたつは日本語俳句『句集マナウス』、そして素晴らしく洗練され、しかもアマゾンの魅力に満ちたポルトガル語の句集『百枚の花びらの菊』（原題はポルトガル語）であった。帰国してすぐ『百枚の花びらの菊』を日本に紹介し<sup>1)</sup>、『句集 マナウス』については、この2、3年で少しずつ紹介し始めたが<sup>2)</sup>、『アマゾン季寄せ』に関する報告は、今回が初めてである<sup>3)</sup>。

アマゾンは極めて有名な地域であるにもかかわらず、「実際にその姿を知る者は数少ない」（前掲・丸山『アマゾン五〇〇年』）。いわんや彼の地で日本語俳句とポルトガル語ハイカイの両方が詠まれていることを知る人は稀であろう。

ブラジルの俳人たちの間でも、実際にアマゾンの気候や自然を知る人は少数であり、『アマゾン季寄せ』が編集されたことを知ってはいても、実際にそれを手に取って読んでみようとする人はブラジル国内でも極めて少ないのである<sup>4)</sup>。

さて、その前にブラジルにおける俳句文化について概観しておく。ブラジルは世界各地に例を見ないほど、俳句・ハイカイ（ポルトガル語のハイク）が盛んである。日本人移民がもたらした日本語俳句の歴史は、そのごく初期の移民の時代から始まり、すでに110年ほどの歴史がある。同じ頃、ブラジルの詩人たちはフランス経由で入ったハイカイ、つまり外国語で詠まれたハイクに興味を抱き、両者の間では1937年頃から交流が始まっていた<sup>5)</sup>。こうして20世紀初頭のブラジルで、ふたつの言語による俳句創作が開始された。ポルトガル語ハイカイはフランス語などの国際ハイク同様、季語にはほとんど関心を示さなかったが、この後、日系準二世<sup>6)</sup>の俳人によってポルトガル語ハイカイにも季語と五・七・五のシラブルを導入するグレミオ・ハイカイ・イペーの活動が開始され現在まで40年近く継続されている<sup>7)</sup>。

このように独自の展開を遂げたブラジルの俳句・ハイカイは、70年足らずの間に何と8種類もの歳時記を生み出した。そこにブラジルという、日本とは気候が異なるにもかかわらず、日本で生まれた季語への強いこだわりがあらわれている。広大な国土を持つブラジルのほとんどの地域は亜熱帯に属するが、それでもサンパウロのように標高約800メートルに位置する都市には、一応、四季の移り変わりがある。そのため歳時記は日系人が多く住むサンパウロの気候を中心に編集されている。

ところが『アマゾン季寄せ』だけは特殊で、熱帯に属するアマゾン地域にふさわしい歳時記を目指し、2004年に第7番目の歳時記として誕生した。本稿では、8番目に創られた、2006年刊『ブラジル歳時記』と比較しながら、『アマゾン季寄せ』の特色と意義について考える。

2006年刊『ブラジル歳時記』は現在、確認されている中で最新の歳時記であり、それまでの歳時記の集大成としての性格を持つと思われる<sup>8)</sup>。他の7種類のブラジルの歳時記の場合も日本と異なる気候風土で編まれるには大変な努力と工夫が重ねられたに違いない。その上、アマゾンは熱帯気候であるがゆえ

に、さらなる工夫を必要としたことは想像に難くない。だからこそ自ら新たな規範を整えなくてはならなかったのである。

## 1 『アマゾン季寄せ』・『ブラジル歳時記』の構成と季語数

まず、ブラジルで編纂された8種類の歳時記を成立順に示しておこう。

- |   |       |                   |  |
|---|-------|-------------------|--|
| 1 | 1938年 | 『季題分類』            | 市毛暁雪編  |
| 2 | 1953年 | 『俳諧歳時記』           | 南米時事社編（内容不明）                                 |
| 3 | 1977年 | 『ブラジル歳時記』         | ブラジル俳人協会編、間島稲花水・渡部南<br>仙子担当                  |
| 4 | 1981年 | 『ブラジル季寄せ』         | 梶本北民編  |
| 5 | 1989年 | 『ブラジル歳時記』         | ブラジル俳文学、監修・橋本悟郎、行事解<br>説・間島稲花水 <sup>9)</sup> |
| 6 | 1995年 | 『ブラジル俳句・季語集・自然諷詠』 | 増田恒河編  |
| 7 | 2004年 | 『アマゾン季寄せ』         | 原田清子・斉藤けい・竹下澄子・渡部悦子<br>編                     |
| 8 | 2006年 | 『ブラジル歳時記』         | 佐藤牛童子編                                       |

『アマゾン季寄せ』と『ブラジル歳時記』は、それぞれ7番目と8番目に位置するが、両歳時記の構成と規模はかなり異なっている。また『ブラジル歳時記』を編集したのは、ブラジル全土に俳句を広めて宗匠的な役割を果たした佐藤念腹の実弟・佐藤牛童子である。彼は兄亡き後、後継者としてこの歳時記編集の指揮をとった。一方『アマゾン季寄せ』は「はしがき」に編者のひとり原田清子が「何分、編集に携わる者が慣れておらず」と記すように、句会（「ベレン風みどり会」）に集う女性4名によって季語とすべきものを選んでいった<sup>10)</sup>。『アマゾン季寄せ』は日本はもちろん、ブラジルの中心地から遠く離れ、さらに宗匠的な系譜に連なる者ではない、女性の俳句愛好家たちによって成ったのである。

構成の点でも大きな相違点がある。『ブラジル歳時記』は日本の一般的な歳

時記同様、四季に分類するが、『アマゾン季寄せ』には四季の区別はなく「乾季」と「雨季」に大別される。熱帯だから当然と言えば当然なのだが、その判断は画期的だった。たとえばアマゾンにおいて著名な句集『樹海』が「雨季・春・夏・秋」の四季に分けたのに対して、編集に当たった原田清子は次のように記している。

先人の残された句集『樹海』によりますとアマゾンを雨季、春、夏、秋、に分けて作句をしておられたようですが、この季分けも私たちにはしっくりせず又、上流のマナオスと河口のベレンでは大きな違いも見られます。私たちは思い切ってこの地の気象を乾季と雨季に大別して季語集を作ることに決めました。（「はしがき」『アマゾン季寄せ』下線部は筆者）

同じく竹下澄子の「あとがき」にも「乾季」・「雨季」に大別したことが記されるが、実際には「乾季」「雨季」の見出しは記されておらず、1月から12月まで月ごとに配列されている<sup>11)</sup>。但し季語の例から乾季と雨季の区切りを知ることが可能である。いずれにしても『アマゾン季寄せ』は歳時記として独自の路線を示す。そして「この地でなくては詠めない作品等は当然採録し」た（竹下澄子「あとがき」）。これは自分たちが暮らす地域の天候や自然を率直に受け止めた結果であり、歳時記の歴史に一石を投じる意義を持つ。

だが、このような感覚は実は『ブラジル歳時記』につながる、それ以前のブラジルの歳時記が目指す方向性でもあった。ブラジルの歳時記は日本の歳時記を手本としつつもブラジルの気候に合った歳時記を創ろうとしてきたからである。それはアマゾンの俳人たちが熱帯にふさわしい歳時記を目指したことと軌を一にする。もちろん『ブラジル歳時記』における「四季」と『アマゾン季寄せ』の「乾季・雨季」という構成には大きなひらきがある。その季題分類の項目は次のようになっている。

『ブラジル歳時記』	<u>時候</u> 、 <u>天文</u> 、 <u>地理</u> 、 <u>植物</u> 、 <u>動物</u> 、 <u>人事</u>
『アマゾン季寄せ』	<u>天文</u> ・ <u>時候</u> 、 <u>行事</u> ・ <u>生活</u> 、 <u>植物</u> 、 <u>動物</u>

「時候・天文」は『アマゾン季寄せ』では「天文・時候」と逆の順になっているが、後述するように特に問題はない。また『ブラジル歳時記』には「人事」の項目はないが、「行事・生活」（波線部）に含めているようだ。

唯一、相違するのは『アマゾン季寄せ』に「地理」が見当たらない点である。『ブラジル歳時記』が「地理」を季題に掲げるのは、日本の一般的な歳時記を襲ったからであろう。また熱帯・亜熱帯を含むブラジル全土を対象とするためにも「地理」は必要だったと考えられる。逆に『アマゾン季寄せ』が「地理」を設けなかったのは、原田清子が記すように次のような事情ゆえであったか。その「はしがき」には、「(ベレンというアマゾンの(筆者・注))一地方のみに住んで居るため、この広大なアマゾンの諸現象や習慣を知ることが少なく又、これを調べるには時間も人も経済的にも全てに貧しく、思いの万分の一も果たせなかった」とある。

このように両者の構成において特筆すべきは、やはり「四季」か「乾季・雨季」の二季に大別するかという点に絞られる。

そこで『アマゾン季寄せ』の特色を捉えるために、まずは両者の季語数を見てみよう。

総季語数	『ブラジル歳時記』	『アマゾン季寄せ』
	2170	556

『ブラジル歳時記』は『アマゾン季寄せ』の4倍近くの季語を取録するが、それは前者がブラジル全土から季語を集めたからである。ただし『ブラジル歳時記』の季語数には、季節によってかなり偏りがある。

『ブラジル歳時記』			
春	393	8月—10月	
夏	878	<u>11月—1月</u>	
秋	424	2月—4月	
冬	381	5月—7月	

このように夏は他の季節の2倍以上の季語を持つ。国土の大部分が亜熱帯で、さらに熱帯地域も含むため、結果的に夏の季語が突出して多くなるのであろう。

ところが『アマゾン季寄せ』は「乾季」「雨季」のふたつに大別する方針を立て1月から12月まで、各月ごとに約50前後の季語を挙げる。

『アマゾン季寄せ』

1月—45	2月—48	3月—50	4月—43
5月—45	6月—45	7月—56	8月—57
9月—42	10月—49	11月—36	12月—40

このような両者の構成と季語数を眺めた上で、以下、アマゾンの気候の特徴について考える。

## II アマゾンの気象・気候の肌感覚と生活感—5、6、7月を例に—

『アマゾン季寄せ』の編集は、この地の俳人たちの切実な願いによるものである。彼女たちは熱帯気候の気象と環境の中で作句しなければならず、アマゾン特有の季語集の必要性を痛感していたようで、その編集は「長年の念願」であった<sup>12)</sup>。

ではアマゾンの気象・気候とは、どのようなものであろうか。年間の気温等の数値的なデータを調べることはできても、現地で暮らしていないと、その肌感覚はわからない。それは『ブラジル歳時記』の場合も同様であるが、両者の季語を手がかりにアマゾンの気象・気候とその捉え方についてみてみたい。もとより両者共に苦心して採録、編集されており、それぞれの季語が各々の気象・気候にぴったり合っているかどうかはわからないため、ごくおおまかな把握にとどまらざるを得ないことを申し添える。

ここでは「時候・天文」(『アマゾン季寄せ』では「天文・時候」)を中心に比較する。この季題は両者ともに「月ごと」の季語が明確なため、その月の季節感の違いがきわめて特徴的に現われるからである。併せて『アマゾン季寄

せ』の「行事・生活」及び『ブラジル歳時記』の「人事」、その他、動植物等によって気候・気温の肌感覚が伝わると思われる場合には、それらの季語を加える。

まず、両歳時記の違いが対照的にあらわれる5月、6月、7月の季語を挙げ(13)。

『ブラジル歳時記』	『アマゾン季寄せ』
冬(5、6、7月)「時候・天文」の季語	5、6、7月「時候・天文」の季語
■5月 <u>冬めく</u> 、 <u>乾季</u> 、冬の朝	■5月 <u>新緑</u> 、 <u>戻り雨季</u> 、 <u>浮き草流れる</u>
■6月 <u>カジュウの雨</u> 、 <u>霞</u> 、 <u>春の霰</u>	■6月 <u>雨季明け</u> 、 <u>万緑</u> 、
■7月 <u>凍る</u> 、 <u>三寒四温</u> 、 <u>春隣</u> <u>寒波</u> 、 <u>凧</u> 、 <u>霜</u> 、 <u>霰</u> 、 <u>雪</u> 冬日和、冬の空、寒月 凍星、冬銀河、時雨、寒雷 冬の水、水潤る、枯園、枯牧 冬野、枯野、霜柱、冬ざれ	■7月 七月尽、 <u>日照り雨</u> 、 <u>薫風</u> 風光る、霧、木下闇、 <u>緑陰</u> 、 <u>啓蟄</u> 減水始まる、 <u>フリアーゼン</u> 囀り
■冬の「人事」の季語 <u>熱爛</u> 、 <u>凍死</u> 、 <u>避寒</u> 、 <u>炭火</u> <u>焚火</u> 、 <u>懐炉</u> 、 <u>襟巻き</u> <u>毛糸編む</u>	■7月「行事・生活」の季語 七夕、 <u>夏休み</u> 、 <u>凧</u> 、 <u>避暑</u> プール、 <u>浜日傘</u> 、 <u>海水浴</u> 、 <u>水着</u> <u>水泳</u> 、 <u>キャンプ</u> 、 <u>貝掘り潮</u> シャボン玉、草いきれ

以上、『ブラジル歳時記』及び『アマゾン季寄せ』の5、6、7月の特徴的な季語の例を挙げ、さらにとりわけ注目される季語については下線を施した。これらを比べてみると、前者の5月「冬めく」に対して後者は「新緑、戻り雨季、浮き草流れる」とあって、初夏の印象である。また前者は「乾季」だが、後者は「戻り雨季」で乾季にはなりきっていないものの、それぞれが「冬」と「夏」に分かれている。

特に7月は対照的で、『ブラジル歳時記』は「凍る、三寒四温、寒波、凧、霜、霰、雪」とあって、まさしく冬の真最中である。「人事」の項も「熱爛、凍死、避寒、炭火、焚火、懐炉、襟巻き、毛糸編む」などといった季語が並ぶ



のに対して、『アマゾン季寄せ』は「時候・天文」に「日照り雨」、「行事・生活」には「夏休み、避暑、海水浴、水着、水泳、キャンプ、貝掘り潮」など真夏の暮らしを示す季語が挙げられる。

このように7月の季語を比較すると、この月が両者の気候が最も異なることがわかる。『ブラジル歳時記』も『アマゾン季寄せ』も、それぞれに季節を捉える季語を採録すべく努力したのである。前者はブラジル全土を、後者はアマゾン独特の季節を映すために。アマゾンには四季というものはないけれども、ふたつの歳時記から、おおよその傾向が浮かび上がってくる。ブラジルの7月は「冬」、アマゾンは「夏」で、対照的なのである。

### III 『ブラジル歳時記』による熱帯地域アマゾン地方の捉え方—12月を例に— 『ブラジル歳時記』は、夏について次のように記している。

#### 夏

ブラジルの夏は十二月二十一日に始まり翌年三月二十日迄であるが、季節感を主とする季題の上では十一月八日前の立夏から二月五日前後の立秋迄の十一月、十二月、一月を「夏」とする。

この11月から1月までの「夏」の「時候・天文」には、以下のような季語が並ぶ。

11月—夏、立夏、初夏、十一月、夏めく、薄暑、麦の秋、以上7例

12月—短夜、雨季、夏至、暑さ、涼し、盛夏、極暑、秋近し、晩夏、ピラセーマ、スコール、木蔭、炎天、喜雨、逃げ水、赤潮、夏の海、アマゾニア、赤道、熱帯、新緑、万緑、椰子の実、緑陰、青葉  
(以上、74季語のうち、25例を掲出)。

1月—「夏 新年」として、新年、元日、初夢、宝船、若水、初ミサ、賀状、初電話、初暦、書初、初荷、初芝居、初漁など。

(73例中、9例掲出)。

これらの季語は、ほぼすべて、新年行事にかかわっている。新年も夏だが、季語は「天文」に関するものは見当たらず「時候」に限定される。こうした「夏」の季語で着目したいのは、12月の「アマゾニア」「赤道」「熱帯」などである(下線部分)。ブラジルのほとんどの地域は真夏で、まさしく「盛夏」「極暑」「炎天」の時期であるから、こうした季語がここに配されるのは当然だが、『ブラジル歳時記』は「極暑」を次のように説明する。

### 極暑

夏の最も暑い日のことをいう。アマゾン地方では五十度近い極暑の日もあるという。大暑。酷暑。(下線は筆者)

『ブラジル歳時記』が12月の最も暑い時期に「アマゾニア」「赤道」「熱帯」を季語とするのは、アマゾン地方が想像を超えるほどの酷暑の地という認識があるからだ。実際、その通りであろうが、「五十度近い極暑の日もあるという」と伝聞表現になっていることから、サンパウロの編集者たちはアマゾンの季節を直接、体験していないことがわかる。

では『アマゾン季寄せ』の12月はどうか。そこには「残暑」の季語はあるが、最も暑い季節ではない。アマゾンが最も暑いのは「乾季最中」の季語がある10月で、『アマゾン季寄せ』は、その「天文・時候」に次のような例を掲げる。

油照り、日盛り、灼ける・焦げる、早・大早、乾季最中

「行事・生活」には、「団扇」「籐椅子」「サングラス」「アロハシャツ」「外寝」「夜釣り」などが挙げられており、真夏の生活の様子をうかがうことができる。つまりアマゾンは『ブラジル歳時記』の真夏とは、2ヶ月ずれるのである。

また『ブラジル歳時記』12月の「天文・時候」には、「アマゾニア」「赤道」「熱帯」といった季語が並ぶ。これらの季語はアマゾンにおける季節

を考慮したのではなく、サンパウロから見て「真夏」を感じさせるという観点から採られたと考えられる。それは「アマゾニア」という一地方の名称が夏12月の季語になっていることに象徴される。サンパウロを基軸として編集されるというのは、こういうことなのだ。それゆえにこそアマゾンの俳人たちは何としても自分たち自身の歳時記を創る必要があった。

もう少し例を挙げよう。『ブラジル歳時記』の「夏」の部にはアマゾン独特の動物や、雨季の期間における生活風景など、次のような例がある。

鰐、浮家屋、舟タクシー

「鰐」は、『アマゾン季寄せ』では10月に挙げられており、『ブラジル歳時記』とは、やはり2ヶ月時期がずれる<sup>14)</sup>。「浮家屋」や「舟タクシー」は『アマゾン季寄せ』には見当たらないが、このような日常生活を詠んだ俳句は、しばしば見受けられる。

浮家の子等カヌーの友呼ぶ秋うらら

東 比呂

『句集 マナウス』2018年版4月

床下に鰐来てさわぐ増水期

白柳一草

同上、1993年版3月<sup>15)</sup>

カヌーで行き来するのは雨季の時期だが、アマゾンのその時節は1月から6月である。『ブラジル歳時記』と「1月」だけは重なるものの、残りの5ヶ月は、ずれてしまう。よって「舟タクシー」もサンパウロから見たアマゾン観だといえよう。

もちろん『アマゾン季寄せ』「はしがき」に記されるように、アマゾン地方においても河口のベレンと中流のマナウスの間でも気候の違いはあるが、サンパウロとの相違は、それ以上に大きい。

このように『ブラジル歳時記』は、サンパウロの季節から捉えたアマゾン観によって季語を採取する。サンパウロの季節に軸足を据えるため当然のこととは言え、アマゾンの側からすれば、その季節感にはかなりの隔たりがある<sup>16)</sup>。

#### IV 『アマゾン季寄せ』に見る季節感—「雨季入り」から「雨季最中」へ—

熱帯特有の気候である「乾季・雨季」に大別した『アマゾン季寄せ』だが、実際には月ごとの季語を掲げている。これらを眺めてみると、熱帯アマゾンの毎月の季節の特色や豊かな季節感が伝わってくる。

ではアマゾンには、どのような季節の変化があるのか。ここでは簡単にその季節の推移を追う。

「雨季」と「乾季」の起点となるのは、次のふたつの月である。

1月 雨季入り

6月 雨季明ける

ここではまず、「雨季入り」の1月にどのような季語が配されるのか、特徴的だと思われるものを挙げる。番号は『アマゾン季寄せ』に採られた順に私に付したものである。まず1月の45例中、8例を挙げる。

3 雨季入り 4 雨季曇り・朝曇り 5 雨季の雷 6 新年  
20 仔牛の焼印 22 胡椒植う 23 ジュータ播く 28 花胡椒

このようにアマゾンの1月は「雨季」と共に始まる。そこに「20仔牛の焼印」「22胡椒植う」「23ジュータ播く」といった牧畜や農業作業の季語がみえる。そこからは「雨季」で始まる「新年」に人々が忙しく立ち働く姿が見えてくるようである。

胡椒やジュータはアマゾンを代表する特産物で、しかも日本人移民がそれらの栽培に密接にかかわったことから、日本語俳句にふさわしい季語だといえる。

植物や動物も20例ほど挙げられているが、その植物には次のような例がある。

25 サンダンカ（イシヨラ） 30 花マモン（※パパイヤの花）

31 スイナン

などといった日本ではなじみのないものもあるが、24 アカシアの花 26 日々草  
27 百日草 32 ザボンの花 35 芙蓉・酔芙蓉など、見慣れた植物もある。

特に1月は、

22胡椒植う 28花胡椒

の両方が採られており、2月には、

70胡椒くくる

とあるから、1月に植えた胡椒はすぐに花を咲かせ、翌月にはその木をくくらなければならないほど成長することがわかる。但し、収穫時期は9月である。季語に「415胡椒収穫（胡椒もぐ・胡椒干す）」とあることからわかる。

1月は雨季で、草花が生き生きと咲き、アマゾン地方の特産物である胡椒やジュータを植える時期である。動物は9例で、蜥蜴や守宮など日本でも見かける小動物ばかりである。

2月も「雨季」の最中で、47の季語が挙げられている。

52雨季最中 53雨季寒

などと雨季を冠する季語が6例続く。1月が「雨季入り」で、2月は雨季の最中なのである。その「雨季最中」の肌感覚は、

49朝寒・肌寒

である。熱帯であっても雨季の最中の朝は「肌寒い」のである。だから

66毛布

が必要であると同時に、

65蚊帳

も要る。同じ月に「毛布」と「蚊帳」が必要なのである。雨が降り続いて湿度が高いので蚊帳は必要、なおかつ、朝は肌寒いため毛布も必要。アマゾン特有の季節感である。もっとも寒いと言っても、

雨季寒しアマゾン二六度なり（53雨季寒）

という作があるように日本の感覚とは異なるのだが、季語の例はその肌感覚を伝えてくれる。

農作業の季語もある。

68木の実植う 69苗・苗床 70胡椒くくる

「苗・苗床」は日本の梅雨時の農作業を連想させる。「木の実植う」は何の木の実であろうか、雨の季節に植える方がよく育つのであろう。他方、「胡椒くく

る」は前述の通りで1月に植えて伸びた枝をくくる作業で、この時期の作物の育ち方がわかる。

さまざまな草花も咲く。

71花ミカン 72花レモン 75プリマベéra

76ストレリチア（火の鳥草） 77苔の花 78花ゴヤバ

79狐ジュニア 80花糸瓜 82花ウルク（紅の木）

「75プリマベéra」は春を告げる花で、サンパウロでは今年2023年8月中旬には満開になっていたが、アマゾンでは雨季2月の季語になっているのに驚く。やはりサンパウロとアマゾンの気候は、かなり異なることをあらためて認識させられる。このような例は、ほかにも数多くあるのであろうが、この1例を以てしても、アマゾンという熱帯地方の季節感とはサンパウロの季節感には収まりきらないのである。

3月も同様である。50の季語が挙げられており、天候に関しては次のような例がある。

96雨季深む 97雨季籠り 98季雨激し

という雨季に関する季語が並ぶ。アマゾンでは「季雨激し」という天候であるのに対して、『ブラジル歳時記』の方には「雨季上がる」とあって、乾季・雨季のふたつしかないアマゾンでは雨季の期間が長い。

さて『アマゾン季寄せ』の3月に戻ると、そこには、

99木の芽（木の芽風・木の芽時）

とあり、雨季の最中で木の芽が芽吹く。一方、

106マンジョーカ掘り 107草取り・草抜く

とあるように芋の一種であるマンジョーカの収穫が行われている。

雨の時は肌寒さを感じるとする季語があったが、それを裏付けるように、

109風邪 110咳

といった季語もみえる。

植物も多彩である。

111ペゴニア（秋海棠） 112カラー（海芋）

113金雨花 114仙人掌の花 115帝王の杖

119椰子一般 120季雨茸 121カランボーラ

122バカバ 126クプアスー 127花キャボ (キャボ花)

これらはいかにも熱帯の植物だが、実際には知らないものも多い。その中に混じって、116朝顔 117夕顔 118露草などといった日本でもなじみ深い花もみえる。

朝顔・夕顔・露草と並ぶと、日本では夏か秋だと思ってしまうが、『アマゾン季寄せ』では雨季で「雨季深む」「雨季籠り」「季雨激し」の期間にさまざまな植物の花が咲く。特に「126クプアスー」という果物はアマゾンの特産物でジャムにしたりアイスクリームにするとたいへん美味である。ここには「クプアスー」とだけあるので、花ではなく果物が成るのであろう。

動物は、135蝸牛 136蓑虫 137毛虫

など日本でも身近なものも挙げられているが、熱帯独特かと思われるものに次の例がある。

133アララ 142蛇 (毒蛇・ジボイア・ジャララカ)

アララは美しい羽根を持つ鳥で、先住民が儀礼用の衣装などに使ってきたようだ。

このように『アマゾン季寄せ』は、毎月のアマゾンの暮らしの贅を伝えている。

以上、1月の「雨季入り」から2月の「雨季最中」を見てきた。これらの季語によれば熱帯は1年中、酷暑が続くとか、雨季はずっと雨ばかり降るといった我々の思い込みとは全く異なって、月ごとに移りゆく豊かな季節感や暮らしの営みがあることが伝わってくる。『アマゾン季寄せ』は、ブラジル国内においても独自の魅力を放っている。

## V 『アマゾン季寄せ』の意義

『アマゾン季寄せ』は熱帯季題を発見した点に、その意義がある。アマゾンではブラジルの俳句界の中心地サンパウロの気候を核として編集された歳時記ではアマゾンの気候風土に合った作品は詠めなかったため、独自に編集する必要があった。こうして新たな歳時記が誕生した。

その編集方針は日本やブラジルを相対化することであり、俳句の神髄である「今・ここ」を表現する試みでもあった。同時に忘れてならないのは、指導者的な立場にいるわけではない、女性の俳句愛好者たちが女性だけで歳時記を編集した点である。日本ではなかなかできないことなのではなかろうか。このような点にもブラジル俳句文化の多様性と豊かさを見てとることができる。

今、日本では考えにくいと言ったが、『アマゾン季寄せ』は「四季」ではなく「乾季・雨季」のふたつの季節に大別している。この判断にも極めて独自性がある。

かつてアマゾンで出版された句集『樹海』で「雨季・春・夏・秋」に分けたことに対して、ブラジルにホトトギス派の俳句を広めた佐藤念腹は違和感を表明している<sup>17)</sup>。彼が存命で『アマゾン季寄せ』が「乾季と雨季」に大別したことを知ったら、どのように評したであろうか。

この「乾季と雨季」という分け方は、虚子を仰ぐ念腹の方針とは全く異なる観点であり、「日本離れ」・「念腹離れ」と言ってもよい。しかしながら自然を観察して写生を重んじる点は、実は同じなのであって、むしろアマゾンの季節に即した風物を詠むために編まれ、アマゾンの季節と暮らしぶりが豊かに表現されたのであった。その意味ではホトトギス俳句の方針に忠実だった。

サンパウロの気候を軸に編集された歳時記は、アマゾンの季節感・生活感覚とは大きな齟齬が生じざるを得なかった。そこで現地の気候に忠実に、いわば原点回帰した結果、出現したのが『アマゾン季寄せ』だと言えよう。それは大きな決断ではあったが、それを実現させたのは日本語俳句の中心地サンパウロから地理的に遠く、心理的にも距離感があったからであろうか。いずれにしても指導者的な立場にない女性俳人たちによって成し遂げられたのは、彼女たちが生活感を基軸とする感覚に支えられていたからではなかろうか。

## むすびにかえて

『アマゾン季寄せ』の特色と意義について見てきたが、課題は幾つもある。どの程度、活用されているか、あるいは他の熱帯歳時記『ハワイ歳時記』『フィリピン歳時記』との比較なども必要であろう。



前者については、今年2023年8月にアマゾン河口の港湾都市ベレンとそこから約200km奥地に入ったトメアスーで聞いた話は興味深いものがあった。ベレンは『アマゾン季寄せ』が編集された地であるが、4人の編集者のひとりである渡辺悦子さんと会うことが叶い、竹下澄子さんはかなり奥地に居住しておられるとのことであった。原田清子さんと斉藤けいさんは、すでに亡くなっておられた。

『アマゾン季寄せ』編集の原動力となった「ベレン風みどり会」では、この『季寄せ』は「不完全」だとして、現在ではほとんど活用されていないということであった。

ところがベレンから200km奥地のトメアスーの句会では逆に、これを活用するだけでなく、さらにトメアスーの気候に合わせて改訂していた。ベレン風みどり会がなぜ『アマゾン季寄せ』を「不完全」なものとして用いないのか、その辺の事情は、具体的に聴くことはできなかったが、一方、トメアスーの『花胡椒』同人たちの改訂作業は実に興味深い。ベレンとトメアスー、それぞれの句会の向き合い方は異なるものの、いずれも何とかして身近な自然・気候を句作に活かしたいと願う姿があらわれている。

熱帯における句作はブラジルが温帯に近い気候を持ち、且つサンパウロというメディアの中心を持つがゆえに、常にその中心をなす「基準」と熱帯の現実との狭間で、自らのアイデンティティを探し続ける旅を続けていくことになるのであろう。

ところで、『アマゾン季寄せ』を眺めていると、不思議に思うことがある。7月の季語に「フリーージェン」（寒波）が出てくるからである。102頁に7月の特徴的な季語を挙げたが、『アマゾン季寄せ』7月には、「日照り雨・緑陰」などがあり、さらに「海水浴・キャンプ」などもあるので、初夏や夏の季節に違いない。そこになぜ「フリーージェン」（寒波）が採られているのかが解せなかったのである。

一方『ブラジル歳時記』によれば、7月は「冬」で、まさしく「寒波」の季語があり、「霜・霰・雪」に加えて「凍死」まである。7月のアマゾンとサンパウロは夏と真冬という正反対の季節だということはすでに述べた通りだが、

アマゾンにおける「フリーージェン」が気になった。そこでアマゾン川中流域の大都市マナウス在住・アマゾナス連邦大学の内ヶ崎留知亜准教授に問い合わせたところ、今年2023年7月にもフリーージェンは1週間ほどあって、25度くらいまで下がったそうである。通常30度くらいで暑いため、25度であっても、気温差のためにとても寒く感じて厚着したとのことであった。

ただ、彼女からブラジルの気候サイト及び「フリーージェン」をテーマにした修士論文情報をご教示戴いたところ、信じられないような事実が判明した。これらによれば「フリーージェン」は6月から8月にかけてアマゾンで頻繁に発生するが、地域によっては5度—10度になる場合もあり、特に1975年7月にはアマゾンの中央部で最高気温3度を記録し、アマゾンの南西部（ Rondônia ）では霜が降りるほどの強烈な寒波が発生したという<sup>18)</sup>。

アマゾンがいかに多様な気候を含んでいるか、あらためてその奥深さを思い知ることであった。ちなみに内ヶ崎氏によれば、マナウスで40年以上、生活しているある俳人に、アマゾンの気候と季語の関係について尋ねたところ、次のような感想が返ってきたという。

「アマゾンの季節は簡単に分けられないのがアマゾンなのであって、季節は自分で見つけて感じたことが季語なのだ」と。

アマゾンの気候・季節と季語との関係は、きわめて複雑なのである。

## 注

- 1) 【資料紹介・解説・分析・翻訳】「ブラジル・アマゾンにおけるハイカイ集『百枚の花びらの菊』—1985年アマゾナス州マナウス市発行」紹介文・久富木原玲、英語訳・マダレナ・ハシモト、日本語訳・分析、スエナガ エウニセ『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』第4号 2018年3月。なおこの句集については、ブラジル・カンピーナス大学における日本研究国際学会の基調講演「日本の俳諧・俳句からブラジルのハイカイへ——日本文化の特異性と新展開」でも紹介した。本講演録はポルトガル語版が同学会誌によってオンライン出版され（2020/2/24）、その日本語版は『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』第6号（2020/3）に掲載された。
- 2) 久富木原「ブラジル・アマゾン地方の日本語俳句——二〇一六年版『第三十一号 句集マナウス』について『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第23号（日本文化専攻編

- 第十三号) 2022年3月、久富木原「床下に鰐来てさわぐ増水期——ブラジル・アマゾンの句集を読む」『日本文学』VOL. 71 2022年4月号、久富木原「ブラジル・アマゾンで「冬」を読む——日本語俳句作者へのインタビューとその作品を通して」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第71号2023年3月など。
- 3) 『アマゾン季寄せ』を日本に初めて紹介したのは、藤原マリ子「ブラジルの歳時記——成立の経緯と特徴」(『国際歳時記における比較研究 浮遊する四季のことば』東聖子・藤原マリ子編、笠間書院、2012年)である。翌2013年、細川周平「ふぞろいな四季——アマゾン版「雨に語れば」(「季節のない国——ブラジル季語をめぐって」『日系ブラジル移民文学II 日本語の長い旅 [評論]』622ページ、みすず書房、2013年)が『アマゾン季寄せ』に言及する。なお本稿は「『アマゾン季寄せ』の特色と意義——『ブラジル歳時記』との比較を通して」と題して国際学会で発表したものを加筆修正したものである(第27回全伯日本語日本文学日本文化大学教師学会(ENPULLCJ)並びに第14回ブラジル日本研究国際学会(CIEJB)リオデジャネイロ州ニテロイ市フルミネンセ連邦大学での口頭発表、2023年9月1日)。本科学研究費グループは、白石佳和氏を代表とする科学研究費チームと協力して、2つのグループ発表を立ち上げて本学会に臨んだ。ひとつは「サンパウロを中心とするハイカイ」グループ、もうひとつは「アマゾンにおけるハイカイ」グループで、筆者は後者のグループで発表した。
- 4) 2023年8月19日、サンパウロで「ブラジル日報」俳壇選者を担当する小斎棹子氏と話す機会があったが、彼女は最近、『アマゾン季寄せ』を取り寄せたとのことであった。新聞の俳壇選者であっても上梓から20年経ってようやく入手したことになる。
- 5) スエナガ エウニセ「ギリェルミ・ヂ・アウメイダにする覚書——1937年のハイカイ論「Meus haikais 余の俳諧」発表前後を探る」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第23号(日本文化専攻編第13号)2022年3月参照。
- 6) 親に連れられて渡伯した子どもは、一般に「準二世」と称されている。
- 7) 18歳で親と共に渡伯した準二世の増田恒河が1987年に「グレミオ・ハイカイ・イペー」という結社を立ち上げて活動を始めた。逝去後は姪のテルコ・オダによって継続され、現在はオダの弟子ダニタ・コトリム(Danita Cotrim)氏がその活動を引き継いでいる。恒河に関しては白石佳和に以下のような一連の研究があり、注目される。白石「季語をめぐると国際ハイクのオーセンティシティについての考察——ブラジルハイカイにおける増田恒河の仲介行為を例に」(『人間社会環境』42巻2021年)、白石「『自然諷詠』とKigologiaをめぐって——日系ハイクとブラジルハイカイの仲介者増田恒河の果たした役割」『Multiplas faces pesquisa japonesa internacional: integralizacao e Convergencia』第1巻2021年)、白石「俳句雑誌『雪』とブラジルハイカイとのかかわり 増田恒河の季語論を中心に」(『比較文学』64巻2022年)、白石「日系ブラジル俳人増田恒河の連句活動の意義」(『金沢大学国語国文』第47巻2022年)など。

- 8) 熱帯歳時記としては、ほかに元山玉萩編『ハワイ歳時記』(1970年)、小林英二編著『フィリピン歳時記——この魅力ある人々』(マニラ句会・1991年)がある。
- 9) 白石佳和氏の教示によれば、本書は3の『ブラジル歳時記』とセットになったものではないかとする。3は季語の解説。
- 10) 原田清子「はしがき」『アマゾン季寄せ』2004年
- 11) 『アマゾン季寄せ』の貴重な先行研究である藤原マリ子『国際歳時記における比較研究』及び細川周平『日系ブラジル移民文学II』(いずれも注3参照)、は「1月—3月を雨季、4月—5月を春、6月—10月を夏、11月12月を秋」と定めているとするが、『アマゾン季寄せ』の「はしがき」「あとがき」は共に「雨季と乾季のふたつの季節に大別」と宣言しており、「雨季・春・夏・秋」とする方針を採っていない。この方針を採ったのは句集『樹海』であって、原田清子は『アマゾン季寄せ』「はしがき」の中で、この『樹海』の分け方は「しっくりせず」「思い切って」「乾季と雨季に大別した」と述べている(99頁参照)。
- 12) 竹下澄子「あとがき」。ここには、「季語はブラジル歳時記を参照したとある。『アマゾン季寄せ』成立以前に『ブラジル歳時記』は2種類ある。1977年(間島稲花水・渡部南仙子担当)と1989年(監修・橋本吾郎、行事解説・間島稲花水)だが、どちらを「参考」にしたのか、現在のところ判然としないため、ブラジルの歳時記の「集大成」と考えられる2006年刊・牛童子編『ブラジル歳時記』と比較することによって、『アマゾン季寄せ』の特色を探る。なお上記2つの『ブラジル季寄せ』に関しては、9)参照。また、「あとがき」には『アマゾン季寄せ』の例句は、1962年から2003年までの作品を対象に、「アララ会、バレン風みどり、サンタイザベル、トメアスー、カスタンヤル、マナウス」と広い範囲から「この地ではなくては詠めない作品等は当然採録」したとある。
- 13) 細川周平は、『アマゾン季寄せ』が「サンパウロや日本と異なる季節に設定した季語の例を挙げて、サンパウロでは原則的には守られていた日本の規則が、すっぱりと破られている」と述べる(3)参照。
- 14) 「鰐」について『ブラジル歳時記』は「鰐」の項のほかに6種類を挙げて詳しい解説を付す。他の季語でも説明は詳しく、一種、博物誌の趣がある。
- 15) 友達の家をカヌーで訪ねる俳句を挙げたように、アマゾン川の水位は場所によっては10メートルも上下するという。ビデオ映像『アマゾンに生きる』(1955年、日本映画社、解説(語り)小沢栄)によれば、雨季の時期は船なしでは生活できないような光景である(本ビデオは神戸市の一般財団法人日伯協会・海外移住と文化の交流センター所蔵)。なお『句集マナウス』は、「西部アマゾン日伯協会マナウス句会」によって編集され、2023年で38号を数える。
- 16) 余談になるが、2023年8月20日に全俳句大会が開催されたが、兼題は「冬」であった。アマゾン河口奥地のトメアスー「花胡椒」句会同人は投句したものの「冬」の季語で

は詠むのに苦勞したという感想を直接、聞く機会に恵まれた。この俳句大会の兼題・選句・表彰は、サンパウロにおいて同市在住の俳人によってなされた。筆者が訪れた8月下旬のアマゾン・トメアスーは想像していたよりも過ごしやすく最低気温22度、最高気温32度前後であった。これはアマゾンとしてはやや涼しいのであろうがやはり「冬」の感覚とはほど遠く、なるほどアマゾンの俳人たちは、こんな「格差」の中で句作しているのだと実感した。

- 17) 佐藤念腹『念腹俳話』12、1964年6月25日（ブラジルトッパンプレス印刷出版会社、1984年6月）
- 18) ①ブラジル国内の気候サイトと、②修士論文の出典は、以下の通り。
- ①気候サイト「Friagem na Amazônia」（アマゾニアのフリアージェン）というタイトルで書かれた記事（2017年10月11日“Tempo de Aprender em Clima de Ensinar”というサイト。ポルトガル語。<https://www.climadeensinar.com/post/2017/10/11/friagem-naamaz%C3%B4nia#:~:text=Quando%20uma%20frente%20fria%20se%20aproxima%20da%20Amaz%C3%B4nia,termo%20friagem%20%C3%A9%20usado%20localmente%20para%20essas%20ocor%C3%A7%C3%A3es>）
- ②アマゾナス連邦大学地理学における修士論文  
著者：IVAN LINHARES RIBEIRO RIBEIRO  
タイトル：AS INCURSÕES DE AR FRIO NO ESTADO DO AMAZONAS 2012 pp. 13-14  
<https://tede.ufam.edu.br/bitstream/tede/2807/4/IVAN%20LINHARES%20RIBEIRO.pdf>

## 付記

『アマゾン季寄せ』においては、例句が挙げられていない季語も算入した。また『アマゾン季寄せ』で、ひとつの季語に関する日本語訳を挙げたり、同趣旨の季語を（ ）内に挙げたりする場合には、1とした。たとえば、9月の、「胡椒収穫（胡椒もぐ 胡椒干す）」の場合、1として数えた。

なお2023年9月1日のブラジル日本研究国際学会（於リオデジャネイロ州ニテロイ市フルミネンセ連邦大学）における発表時には、中矢温氏、根川幸男氏ほか、フロアから貴重なコメントを戴いた。ここに記して感謝申し上げる。「アマゾンにおけるハイカイ」に白石科研の文化人類学研究者・岡田浩樹氏を迎えたことによって本科研の視野も広がった。またサンパウロ及びアマゾンのベレン、トメアスーにおける調査に関しては、本科研分担者でもある白石佳和氏が綿密な計画を立て、同じく分担者のスエナガ エウニセ氏は現地調査及び国際学会発表の関係者との連絡及び通訳等を行なったことを申し添える。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号21H00520の一部である。